
孤独の人魚姫

K 氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独の人魚姫

【NZコード】

N1985Y

【作者名】

K氏

【あらすじ】

人魚の国の人魚姫アーシアは、海上で偶然助けた王子に一目ぼれして、王子に会いたいがために魔女と取引する。「意思を伝える手段を持たずに見事王子の心を射止めござらん。そうしたらおまえは完全な人間になれるし、一本の足と引き換えにもらつた声も返してやるよ」そうして向かった陸の世界。運よく王子に拾われて、何とすぐさま結婚を申し込まれる。簡単に事が運び有頂天になるアーシア。けれど、結婚式の翌日になつても声は戻らなくて。

アンデルセン童話の「人魚姫」をベースにK氏が書かれたあらすじを、私いちおが預かり小説に仕立てました。そのため作者名は「K氏」といたします。上記のあらすじを更新が消化するのはしばらく先になります。

1、成人の儀式（前書き）

あらすじを書かれたK氏には、小説に仕立てなろう様で公開することに許可をいただいています。

「人魚姫」をベースにしているため、溺れるシーンがあります。王子が一人不注意で船から落ちるだけでほとんど描写もできませんでしたが、「ご注意ください。該当のシーンが含まれるのは一話と三話です。

主人公が16歳という年齢の割に幼いです。ですが話が進むにつれて大人になっていく予定です。

1、成人の儀式

プリンズランド 陸にほど近い位置に広大な領土を構える人魚の国。

数ある人魚の中でもっとも栄えているといわれているこの国では、この日、国をあげてのお祭りが催されていた。プリンズランド王の末の娘、第八王女サー・シアの16歳の誕生日だからだ。

16歳といえば、人魚の国では成人する歳にあたる。だが、この日サー・シアは子どものようにふくれつづらをしていた。

「つまんなーい！ わたしのためのお祝いなのに、遊べないなんて！」

駄々をこね、椅子に座つてピンク色の尾ひれで床を叩くサー・シアを、世話係のリリアが苦笑してなだめた。

「サー・シア様のお祝いだからこそです。サー・シア様が式典や催し物に出席してくださらなければ、お祝いは始まりませんわ」

リリアは、サー・シアの艶やかで豊かに波打つ、ストロベリーブロンドを丁寧にくしけずる。

「父さまの誕生日の時は、お忍びで遊びに出了たのにい」

サー・シアは目の前の鏡越しに、茶色の癖つ毛を頭の後ろできつちりまとめたりリアに口をとがらせる。リリアは小さくため息をついた。「サー・シア様は今日で大人になられるのですから、あまりわがままをおっしゃってはいけませんわ」

「うー……」

小さく唸り声を上げて、サー・シアは黙り込む。

サー・シアにとつて、四歳年上のリリアは一番身近な存在だつた。末っ子で、小さい頃に母親を亡くしたため母の側仕えをしていたり

リアの母親に育てられたが、かわいそうかわいそうと言つて甘やかす母親に代わつて、サー・シアのわがままをたしなめてくれるのがリアだつた。また、"ここまでならいいだろう"と判断したわがままには付き合つてくれた。誰よりも側にいて身の周りの世話をしてくれるリアのことをサー・シアは信頼していて、リアが頑として許してくれないことは、しぶしぶながらも言つことを聞くようにしている。

ぶすくれていると、後ろのほうから声をかけられた。

「おやおや。お姫様はご機嫌斜めかい？」

「あ、セラ様……」

サー・シアより先に、リリアが声をかける。

セラはこの国の有力貴族の息子で、サー・シアより六つ年上で幼馴染の間柄だつた。サー・シアの世話係や父王や兄姉以外でただ一人、ここ、サー・シアの私室に入ることを許されている。

青みがかった銀髪を水流になびかせながら、青色の尾びれを緩く動かして移動し、リリアの横に並んでサー・シアを鏡越しにのぞき込んだ。

「せつかくの誕生日にそんなんぶすくれた顔をしていたら、しあわせが逃げてしまうよ？」

サー・シアは顔を赤くし、それからぱつと頬をふくらませる。

「ぶすくれた顔なんてしてないもん！」

「ははっ、そうやって怒つてる顔がぶすくれてるつていうんだよ。國中のみんながお祝いしてくれてるんだから、今日くらいわがまま言わずにずっと笑顔でいたら？」

「わがままなんか

「言つてたんだろ？ サー・シアがぶすくれた顔をしてる時は、たいていりリアにわがままを止められた時だ」

セラに笑顔で図星をさされて、サー・シアはまたうなつて黙り込むしかなくなる。

「そうそう。サー・シア、君呼びに来たんだつた」

「え？ まだ“成人の儀式”が始まる時間じゃないでしょ？」

成人を迎える16歳の誕生日には、“成人の儀式”と呼ばれる儀式が行われる。それは人魚を一日でも見ようものならやつきになつて狩り出そうとする危険なニンゲンを見に行く儀式で、人魚は大人になると海の上に出てもいいことになるので、十六歳の誕生日を迎えると必ず大人と一緒に一度は見に行かなくてはならないことになつていて。そうして危険な場所を教えられ、どういう時に見つけられてしまふかをしつかり頭に叩き込まれて、ようやく一人で海の上に行くことを許され、大人になつたと認められるようになる。

海の上の世界には興味があるけど、サー・シアはいろんなことを覚えなくてはならないその儀式には、始まる前からうんざりしていた。サー・シアのどんよりした気分を察して、セラは苦笑する。

「“成人の儀式”の前に王様が大事な話をしたいとおっしゃつてゐるんだ」

それを聞いて、サー・シアは眉間にしわを寄せた。

「えー？ それってお説教？」

「サー・シアは何かお説教をされるようなことでもしたのかい？」
「してないけど……儀式のことで何かぐどくぐ言われそつ……」

サー・シアは頭を抱える。

だから気付かなかつた。サー・シアの後ろで、セラとリリアが鏡越しに悲しげにほほえみ合つていたことに。

気が進まないまま、サー・シアはセラに連れられて父王の私室に向かつた。

父王はプリンズランドを長きに渡つて平和的繁栄に導いてきたことから、国中の民から信頼され慕われている偉大な王だ。まつりょく政を行う時は威厳を持つて厳しい処断も下すことのあるこの王も、年がいつから授かつた末の王女にはめっぽう甘く、かなりの心配性になる。忙しいためめつたに会えないせいか、会えば必ずと言つていいほど

心配だ心配だといふ話になる。

今回の呼び出しも、成人の儀式のことで心配になつたからだらう。無茶をするな、ちゃんと教えに従えと口酸っぱく言つに違ひない。

そう思つて父王の前まで泳いでいったサー・シアは、思わぬことを言われて田を丸くした。

「え？ 結婚 ？」

「そうだ。おまえも今日で大人になつたことだし、成人の儀式の前に行われる宴の席で、セラとの婚約を発表しようと思う。結婚式は一ヶ月後だ」

「ちょ、ちょと待つて！ まだ結婚してない兄さまや姉さまもいるのに何で！？」

焦るサー・シアに、父王は白髪の混じるよつになつた長いあごひげをなでつけながら、重々しく答えた。

「おまえは16歳にもなつたのに、危なつかしくていかん。結婚をしてセラの妻としての責任を果たすようになれば、少しさ落ち着けるようになるだろ？」

「そんな……！」

父王の横暴に、サー・シアは愕然とする。

サー・シアには夢があつた。

16歳になつたら社交界に出られるようになる。そうしたら素敵な人と知り合つて、とびっきりの恋をしよう。でも、結婚したら恋なんかできなくなる。

セラが結婚相手？

考えられない。セラは小さい頃からリリアと三人で遊んできた幼馴染で、兄のように慕つてゐるけど恋愛対象にはならない。それはきっと、セラも同じはず。

一緒に反対して……！

すがるような思いで振り返ると、セラはあきらめたような笑みを

浮かべて肩をすくめた。

「まあ、觀念することだね。 王様には誰も逆らえない」
それだけのことだつたけど、わかつてしまつた。セラはサー・シアのことを愛してるわけじゃないのに、王に命令されたから仕方なく結婚することにしたのだ。

怒りがふつふつと込み上げてきた。結婚を強要する父王にも、仕方なくそれに従うセラにも。

サー・シアは父王に向きなおり、鈴を鳴らすような愛らしき声を大にして怒鳴つた。

「絶つっ対、嫌！！！」

そして王の私室を飛び出していく。

「サー・シア！」

「放つておけ」

サー・シアを追いかけよつとしたセラを、王は声をかけて止めた。
「そのうちにわかる。セラ、小さい頃から親しかつたおまえと結婚する」ことが、一番幸せなのだと

セラは困つたよつな顔をして遠慮がちに言つた。

「そうかもしだせんが、今放つておいたら危ないよつな気がします。サー・シアは嫌なことを強要されて、それを黙つて受け入れるような子じやありません。下手をすると誕生日のお祝いのために厳重な警戒下にあるこの城から抜け出して、成人の儀式もすつぽかすかもしれませんよ？」

「あ……」

その可能性に気付かされ、普段厳めしい顔をすることで威厳を保つてゐる王は、ぽかんと口を開け間抜け顔になる。

そして、城内外をひっくり返すほどの大搜索が始まった。

その頃サー・シアは、セラが心配した通り城を抜け出していた。小

柄なサー・シアなら通れる抜け道があつて、誰にも知られていないため、厳重な警備もやすやすとかいくぐつてしまつたのだ。

絶対結婚なんかしないつ！

成人の儀式もすっぽかすつもりで、サー・シアはまっすぐ上を目指して泳いでいた。海底に沿つて泳いでいると、夜通し行われるお祝いの光に照らされて、すぐに見つかってしまう。そのため上に向かうしかなかつた。

怒りに任せて泳ぎ続けたため、うつかり海の上に顔を出してしまふ。

儀式もまだ済ませてないのにと怖くなつたが、サー・シアは怒りを思い出して怖さを振り払つた。

父さまがいつまでもわたしを子ども扱いするからいけないのよ！心配されなくつたつて、自分のことは自分でちゃんとできる。

一人で海の上に出たからつて、ほら、怖いことなんか何にもない。初めて見る海の上の世界は、サー・シアが知らなかつた輝きに満ちていた。空に浮かぶのは、大きくてまあるい光。水面が揺れてきらきらと光を反射し、海の底よりはるか遠くまで見渡せる。

陸地の、高い崖の上にそびえ立つ城。サー・シアを挟んで反対側には、海の上に大きな何かが浮かんでいる。そこから陽気な音楽が聞こえてきて、サー・シアは興味を引かれて、そちらに向かつて泳ぎ始めた。

2、お見合いパーティー

満月の照らす、波の穏やかな夜の海。沖に出た大きな船の上では、華やかなパーティーが催されていた。ランプやろうそくで真昼のように照らされた船首側の大きな甲板で、着飾った人々が陽気な音楽を聞きながら、酒を飲み、料理をつまみ、話やダンスを楽しんでいた。

「お久しぶりです。レオ王子」

白い布地に金銀の装飾がほどこされた衣裳を身にまとった金髪の青年は、給仕からワインの入ったグラスを受け取りながら、背後を振り返った。

「これはリービッヒ卿。お久しぶりです、今宵はお楽しみいただけてますでしょうか？」

まだ1、2度しか会つたことのないレオに名前を覚えられていたのが嬉しかったのか、皺の多い四角顔の男性は相好を崩す。

「ええ。存分に楽しませていただいておりますよ。ブリタリア王国ご自慢のコーネル＝クルプカ号は、沿岸諸国最大級　いや、沿岸諸国最大を誇るだけあって、このように穏やかな波ですとほとんど揺れませんな。おかげで快適です」

「リービッヒ卿」

歓談の最中、どこかから女性の小さな声がかかる。

「おお、そうでした」

リービッヒ卿はここにこしながら、背後に隠れるよつとして立っていた女性に、レオの視界を空け渡した。

「こちらにおられる方は、我が国的第一王女ルビア様でして……」

「……」

リービッヒ卿が続ける王女の紹介を、レオは閉口しながら聞き入っていた。

これで一体何人目になるか。

パーティーが始まってから、女性を紹介されることひつきりなし
だ。

周辺諸国の親睦を深める名目で開かれたパーティーだが、本当の
目的はレオの妃選びにあった。

あと一ヶ月で二十歳になるレオは、数年前に亡くなつた王に代わ
つて国を治めている母女王に代わつて、王になることが決まつてい
る。だがブリタニア王国では、王は結婚していなくてはならないと
定められている。世継ぎの決まつている中継ぎの女王ならともかく、
レオは結婚をしたことがなければ世継ぎも持たない。

即位の日が間近に迫つてているのに結婚相手を決められずにいるレ
オのために、女王や臣下の者たちがこのパーティーを用意した。
母が女王に即位した時から、レオが二十歳になつた時に王の位を
譲ることが決まつていて。それなのに妃が決まらないからなどとい
う理由で即位が延期になれば、国民は失望するだろうし対外的にも
体裁が悪くなる。

このパーティーが、レオに残された最後の選択の機会だった。
だが、そう自分に言い聞かせ気持ちを奮つて臨んだにもかかわら
ず、始まつて早々、その気持ちは完全にしおれてしまつていて。

長々と続く王女自慢にしげれを切らし、次の大使が声をかけてく
る。

「レオ王子、お久しぶりです」

「ゲーチェル卿、お久しぶりです。先月お会いした以来でしたか?」

「これも王子の、次期国王の務め。」

そう割り切つて、レオはひきつりそうになる笑顔を懸命に保ちな
がら、令嬢たちの紹介を受け続けた。

薄暗い船尾でぐつたりと手すりにもたれかかるレオに、ワインの

入ったグラスを差し出す者がいた。

「お疲れですね」

「お疲れだとわかるのなら、何故途中で助けようとは思わなかつた、リヒド?」

レオはふてくされながら、差し出されたグラスを受け取る。

銀ボタンと銀の房をあしらつた紺色の衣裳をまとつた彼は、レオの隣に立つて悪びれない笑顔を向けてきた。

「一介の従者が王子のお妃選びの邪魔などしたら、女王様や重臣の方々に叱られてしまひます。それに、わたしとしても王子には早くお相手を決めていただきたい安心させていただきたいのですよ」

それを言われると言い返すことはできない。

手すりに肘を突いて海面を眺めているレオに、リヒドは言い聞かせるように言った。

「相手は自分で選びたいと言つた貴方に『えられた』、これが最後のチャンスですよ。それをフイにしてどうするんですか?」

乳母の息子で乳兄弟として育つたリヒドは、レオが王子だから、仕えている主だからと、いうからだけでなく、レオ個人に対して親身になつてくれる。今も心配してくれていてるのはわかつてゐるのだが、「じゃあ聞くが、おまえはあんな状態の場所に自分を置かれて、伴侶を選べるというのか?」

一通り紹介が終わつたと思つたら、今度は紹介のあつた女性たちに囲まれた。次々に話しかけられ一人ひとりに返事を返すのも大変だつたのに、笑顔を絶やさないで互いをけん制し合つ女性たちを目の当たりにして、始終背中にうすら寒いものを感じていた。なりふり構わず逃げ出さなかつただけでもほめてもらいたいものだ。

「あー……まあ、それは……」

一応の理解はあるのか、リヒドは言葉をにじす。

「結婚は、王になるための大事な責務だとわかつてゐる。誕生日までには決断するから、もう少し待つてくれ」

「わかりました。我が国が招いたのですから、失礼のない程度に姫

君たちのお相手をしてくださいよ。……少し休憩の時間を差し上げます。その間、王子を探してパーティー会場からも抜けだしている姫君たちのことはわたしが何とかしますから」

「助かる」

リビドは口の端をにじと上げると、板敷きの甲板をあまり音を立てないように歩いて、レオから離れていった。

再び一人になつたレオは、手すりに肘を突いたまま空を見上げた。見事な満月。

ううそくやランプで照らさずとも、十分に明るい。穏やかな水面が月の光にさらさらとまたたいて、満天の星空に負けないくらいに輝いていた。

高台にある城からの眺めとはまた違つた、美しく莊厳な光景。めつたに見ることのできない光景を目にしながらも、レオの心は晴れなかつた。

何をやつてるんだ、わたしは……。

自嘲を禁じえない。

ブリタニア王国の世継ぎの王子として生まれ、王になるための十分な教育を受けながら、何不自由なく育つた。父王の早すぎる逝去にもかかわらず今まで王の重圧を背負わずに済んでいたのは、母クローディアが当時まだ8歳だったレオに国を背負わせるのは忍びないと言つて、中継ぎの女王になつてくれたからだ。

それから12年近い月日が経つ。その間、レオは母の傍らで、王の務めの厳しさを見つめてきた。

早く母の肩の荷を降ろしてあげたい。そう思うのに、レオが結婚相手を決めることができなかつたばかりに、決められた期限まで即位の日を伸ばしてしまつた。

母や重臣たちに国益につながる、この国のためになる妃を選んでもらつて結婚するという手もあつた。だが、そうした結婚にレオは

抵抗を覚え、好きな相手を選んでいいという母の言葉に甘えて、結婚相手を決めてほしいと言い出せなかつた。

結果二十歳の誕生日はあと一ヶ月というところまで迫り、レオの選択肢を広げるために、母や臣下の者たちに骨を折らせることがなつてしまつた。加えて、夜にこのような大きな船を出して豪勢なパーティーを開くという苦労をかけておきながら、レオは自身の望む出会いを見つけられなかつた。

誰にも話したことがなかつたが、レオは運命的な出会いを信じていた。目と目が合つた瞬間、この人としか考えられないというくらい激しい恋に落ちる。

そのようなものにこだわつてきたから、もう後がないとこりまできてしまつた。

今宵こそ決めよう。運命的な出会いなどという個人的な感傷を捨てて、國のためになる妃という基準で十分吟味して。

レオは、先程リヒドから受け取つたグラスに視線を落とした。

実は姫君たちから逃げたかったのは女の戦いが怖かつたからだけではない。少しでも他よりリードしようとした姫君たちからワインを我先にと勧められたため、断ることにも疲れてうつかり飲み過ぎてしまつたのだ。

酔い覚ましをしたかつたこともあつてここに隠れたが、いい加減戻らないと各国の大天使たちの不興を買いかねないだろう。

それに喉も渴いてきた。

だが、会場にアルコールの入つていらない飲み物があつただろうか？ そして手元にはワインがある。

一口だけなら酔いが増すこともなく、喉の渴きもなだまるだらう。体を起こしてワインに口をつけようとしたその時、ひっかけるようにして持つっていたグラスが、するつと指先から離れた。

しまつた……！

前屈みになつて掴もうとした瞬間、頭にぐらつと強いめまいを感じ

じる。急に頭を下げるため、酔いが急激に頭に回つたのだろう。どうやらレオ自身が思つていたより、相当酔つていたようだ。バランスを崩したレオは手すりを乗り越えてしまい、月の光にきらきら輝く海に、まっさかさまに落ちていった。

3、月明かりの出会い

サー・シアは、二ングンを必死になつて浜辺に引っ張り上げた。

その二ングンが月を見上げている姿を、サー・シアは海の上に浮かぶ大きなもの、船が作り出す真っ黒な影に隠れて見つめていた。美しいヒトだと思った。遠田であまりよくは見えていなかつたけれど、それでも。

手すりにもたれかかる崩れた姿勢でありながら、それは彼の、全身からあふれる気品を損なうものではなく。端正な顔に浮かぶ物憂げな表情は、サー・シアの胸を締め付けて。

だから、二ングンが海に落ちていくのを見て、とつそに落下地点に向けて泳ぎ出していた。

大きな音。上がる水柱。

サー・シアは、落ちた勢いのまま沈み行こうとする人間を、追いかけた。

何とか服を掴み、沈降を食い止めたサー・シアは、ピンクの尾びれで力強く水を蹴つて海面へと引き上げた。

海上に顔を出すと、船上は大騒ぎになつていた。

「水音がしたのはこつちか！？」

「小舟を出してください！ これは王子の靴です！ レオ王子は先程までここで休憩をなさつていたんです！」

レオ王子……この人はレオ王子と呼ばれるヒトなんだ……。

両腕に抱え込んだ意識のないヒトの顔をのぞき込み、名前を知つた喜びを噛みしめる。だが、そうしていられたのも一瞬のことだった。ばしゃんとう音がして、水面をたたくような音が次第に近づいてくる。

ど、どうしよう……。

サー・シアは慌てた。このままでは二ングンに見つかってしまう。

ニンゲンは海の中では生きられないと聞く。だからサー・シアはニンゲンが怖くなかった。見つかったら海の底に逃げればいい。そうすればニンゲンは追つてこれない。でも、自分から近づけばどうなるかくらい、サー・シアにもわかっている。

助けが近づいているのだから、このニンゲンをここに置いて去ればいいと思ったのだが、サー・シアが手を離すとあつという間に沈み込んでしまう。

サー・シアは仕方なく、ニンゲンの服の襟足を両手で掴んで、海の中を全速力で泳ぎ出した。

「見つかったか！？」

「こうも暗くてはよく見えない！ もつと明かりを！」

「落ちていなかもしれない！ 船の中もお探ししろ！」

離れるにつれ、ニンゲンたちの怒号が遠ざかっていく。

船から一番近い浜 お城の真下にある小さな砂浜は、ほとんどが砂の粒でやわらかい感触さえあつたが、陸地に上がるようになっていたいなさいサー・シアの体を傷つけるものでしかなかつた。海の中よりもずつしりと感じる体の重みに下半身を覆うつろこは傷つき、強い痛みが伴う。けれどそれに構わずサー・シアは浜に這い上がり、渾身の力を込めてニンゲンを引っ張つた。

乱暴ともいえるその振動が刺激になつたのか。上半身が波にかららないところまで引き上げられたところで、ニンゲンは体を跳ねさせるようにして海水を吐き出し、息を吹き返す。

ニンゲンが突然動き出したことに驚いて、サー・シアは襟首から手を離した。ニンゲンが体の正面をサー・シアのほうに向かよつと/or>ので、サー・シアは下半身を勢いよくずつて距離を取る。体を折り曲げてむせ返つていたニンゲンは、やがて咳が落ち着き、ゆっくりと目を開けた。

「君は……」

姿を見られてしまったことにサー・シアは驚き、尾ひれで砂浜を思いきり蹴つて海へと飛び込んだ。

君は……。

咳込んでかすれた低い声。もつ耳には残つてないはずなのに、何度も頭の中で鳴り響き、心臓の鼓動を早くする。

あの声で名前を呼ばれてみたい。あのニンゲンにほほえみかけて欲しい。

サー・シアが思つていた通り、美しいヒトだった。月の光に輝く金色の髪、まっすぐで高い鼻梁、男の人らしい鋭角なラインを描く頬とあご。開かれた双眸は、月の光が届かずどんな色をしていたかわからぬけど、ぐつたりとして弱々しいながらもまばたき一つせすまつすぐサー・シアを見つめた。

あのヒトの瞳はどんな色？ かすれてない時の声は？ どんなことを好み、どんなふうに笑うの？

知りたい。けれど、それは叶わぬこと。知りたいがために近づけば、サー・シアは二ングンたちに捕らわれ、どんな目に遭わされるかわからない。

もう一度と会つことすらできないのだと思つと、サー・シアの胸は張り裂けそうになつた。

やみくもに泳ぎ続けて、どのくらいの時間が経つたのか。

「サー・シア様！」

名を呼ばれ、腕を掴まれた。掴んだのはプリンズランド城を守る衛士を示す赤い薄衣をまとつた男性の人魚だ。

「王様が大層、心配なさつています。城へ戻りましょう

サー・シアにやさしく話しかけた後、衛士は周辺に向かつて声を張り上げる。

「サー・シア様がいらっしゃつたぞ！」

その声にたくさんの人魚たちが集まつてきて、サー・シアを取り囲み守りながら一緒に城へ戻りはじめる。

「「」無事でよかつた」

「本当に」

周囲の人々の安堵の声が城に近づくにつれどんどん多くなつていのを、サー・シアは胸の痛みに耐えることばかりに気を取られて、他人事のように耳にしていた。

サー・シアを叱りつけようと玉座の間で待ちかまえていた父王は、サー・シアの姿を見て怒りを忘れた。

暗がりでは確認できなかつたが、四方から数を集めた夜光虫の光に照らされると、サー・シアの痛々しい有様がよくわかる。やわらかい肌の上半身は細かい傷だらけで、下半身のうろこも傷がついてところどころつやを失い、小さいが血のかたまりがあちこちについている。

「何があつたのだ？」

心配のあまり王が玉座を降りてサー・シアの側まで泳いできても、サー・シアは口を開くことができなかつた。

決まりを破つて海上に出て二ングンと会つたなんて、自由奔放なサー・シアでも父に叱られるだけでは済まされない罪であることはわかつてゐる。

そしてこの胸の痛みも、誰にも決して知られてはならないのだ。

憔悴した面持ちで固く口を閉ざすサー・シアの様子から、父王はこう解釈するしかなかつたのだろう。

「そんなに嫌なのなら、セラとの結婚の話はなかつたことにする。部屋に戻つて、リリアに手当てしてもらへなさい」

サー・シアはからうじて小さくうなづく。

近寄ってきたリリアに背中を押され、サーチアは玉座の間を後ろにした。

ぬぐつた途端あらたな血をこじませる傷口に、サーチアの世話係リリアは眉をひそめた。

「つるこまではがれてしまつて……どのよひにしたら」「こんな怪我ができてしまつんですか？」

責めを含んだ言葉は、サーチアに反省を促すものにも、いつものようにサーチアをむくれさせるものにもならなかつた。

「「めんなさい……」

「うなだれたまま、つぶやくよひに謝る。

今までに見たことのない憔悴ぶりに、リリアはいつものよひお小言を続けることはできなくなつた。手を止め、横からサーチアを抱きしめる。

「お願ひですから、もう一度と今回のよひなことはなさらないでください。こべら搜しても見つからないと聞いて、胸が張り裂けそうでした」

胸元に回る腕に、サーチアはやつと手を添える。

リリアに悪こじをしたと想いながらも、心の大半は別のことを考えていた。

リリアの胸が張り裂けそうになつたのと、わたしの胸が張り裂けそうになつたのは、同じよひなもの？ それとも……。

4、芽生える恋

海に落ちたのは覚えている。

だが気付いた時、田の前には月の光を浴びた少女がいた。田の胸当てと肩に薄衣を羽織つただけの半裸の姿。つぶらな瞳、小さくてかわいらしい鼻、唇は小さくてもふつくりとしている。

レオと田が合ひつと、少女は怯えたように顔を引いた。

「君は……」

かるうじて一聲声をかけると、少女は跳ねるようにしてレオの視界から消えた。重い頭を何とか上げて少女が消えた先に田をやると、大きな魚の尾をくねらせて、少女が海に飛び込むシルエットが見えた。

……人魚？

確認できたのはそこまでだつた。泥酔し溺れかけた疲労が襲い、レオは再び罵倒した。

21

「レオ！　この馬鹿！　しつかりして！」

なじみのある女性の声に罵倒され、体を強く揺さぶられる。

「ダリス様、揺すってはなりません！」

この声も知つていてる声だ。体を揺すつていた手が離れ、手首や首筋に大きくじつじつした手が当てられる。

「レオ王子が見つかつたぞ！」

「急いで女王様に報告を！」

人の声や砂を踏む音などで、周囲が騒がしくなってきた。それらの音に引きずられるようにして、意識が浮上する。

レオはつっすらと田を開けた。

「レオ！　」

リヒドを押しのけないようにして、幼馴染のダリスがレオの顔をの

ぞき込んでくる。いつもは勝気な彼女が、レオと視線が合った途端、両手からははははと涙をこぼした。

「ほんとに心配したんだからあ！」

わんわん泣きながら、ダリスはレオの胸にしがみつく。

「ごめん、ダリス」

「王子、お加減はいかがですか？　頭が痛いとか、具合が悪いなどは？」

リヒドが安堵と不安の入り混じった表情をして尋ねてくる。

「少々疲労が残るくらいで、他は問題ない」

「歩けますか？」

「ああ」

そこまで言葉を交わしたところで、リヒドの表情はよひよひと安堵だけになつた。

「船から落ちるほど酔つていたのなら、何故そう言つてくださいなかつたのですか。王子があのまま見つからなければ、女王様がお許しくださつても俺は自分で首をくくつましたよ」

「悪い。自分でもそこまで酔つてると思わなかつたんだ」
ダリスの細い肩に手を置いてなぐさめつゝ、レオはゆつくりと体を起こす。めまいのする頭を軽く振つた時、砂浜にピンク色に光る何かを見つけた。拾わなくてはならないといつ想いに駆られて手を伸ばす。

それは、金貨ほどの大きさもある、普通の魚ではありえないほど大きな「うし」だった。

「何？」

ダリスがレオの胸元から顔を上げて、レオの手のひらをのぞき込もうとする。

「何でもない」

そう言つて、さりげなく「うし」を握り込んだ。

城に戻ると、知らせを受けた母女王が駆け寄ってきた。いつもはきつちりと結い上げている髪は乱れ、ドレスもどこか着崩れている感じがした。いつも身だしなみをしつかりしている人だからこそ、その様子から身だしなみに気を回せないほど心配してくれたのだとわかる。

「レオ！　レオ！　無事だったのですね！」

母クローディアは、砂まみれのレオの両腕にすがり、どにも怪我はないかと全身を見回す。

「心配をおかけして申し訳ありません。母上」

しつかりとしたレオの声に、クローディアはほっと息をついた。
「報せを受けた時は心臓が止まるかと思いましたよ。こんなことになるなら留守居などせずあなたについていけばよかったです
いえ、最初から船上でパーティーを催さなければ」

言い募るクローディアを、レオは話しかけることで止める。

「母上。招待した皆様は、船上でのパーティーを楽しんでくださっていました。それなのにわたしの不注意で水を差してしまい申し訳ありません。招待客の皆様はいかがしましたか？」

「あなたが海に落ちた後すぐに船を戻し、城内で十分なもてなしをしているわ。どなたもあなたのことを心配してらしたけれど、あなたが無事だったことをお知らせするよう指示を出しましたから、起きて無事を祈つてくださつていた方々は今頃安心してくさつていることでしょう」「うう」

「何から何までありがとうございました」

「ともかく、体の汚れを落として休みなさい。後のことばそれからです」

レオはリビドに連れられてすぐさま皿室に戻り、湯で全身の汚れを落とし夜着に着替えてベッドに入る。

「隣の部屋に控えておりますので、何かございましたらお呼びください

「……

そう言つてリビドは退室する。

ベッドに横になつたレオは、傍らの窓の外を見上げた。

茜色のまだ少し残る空。朝早い時間なのだろう。この時間に見つけてくれたということは、夜通し探してくれていたのかもしない。従者のリビド、有力貴族の娘でレオの幼馴染であるダリス、母クローディア。他にも多くの者たちが搜索に奔走し、招待客をはじめとした多くの人々がレオの安否を気遣つてくれたに違いない。

全員に謝罪と礼を言つて回りたかつたが、体がひどくだるくて母の言葉に甘えるしかなかつた。

一休みしてから、礼を尽くそう。

そう考え眠りにつく前に、レオは手のひらに握りこんでいた物を田の前に掲げる。

普通の魚ではありえない大きさの、ピンク色の一枚の「ひし」。この存在が、あやふやだつたレオの記憶を確かなものにする。あれは人魚だつた。

海流からして、船から落ちてあの浜辺に流れ着くことは考えられない。とすると、レオを助け浜辺に連れててくれたのはあの入魚だ。

人魚なんて伝説の生き物で、存在を信じるほうがおかしいとも思う。だが誰かに助けられなければありえなかつた状況と、残された不思議なうろこに確信を得ていた。

幼い顔立ちをした、愛らしい人魚。レオが気付いたのに驚いて逃げてしまつたが、できるこことなら呼びとめて、せめて礼の一言は言いたかつた。

もう一度会いたい。会つて礼を言つて、そして……。

レオは再びうろこを握りしめ、ベッドの上に腕を降ろして田を閉じると、すぐに眠りの世界へと引きずり込まれていった。

それから三日間、レオは寝込んだ。

濡れた衣服をまとつたまま一晩中過ごしたつけは、次に目覚めた時高熱という形で現れ、なかなか熱が引かなくてまたもや周囲の人々を心配させた。

そして四日目。ようやく起き出して執務室にいる母のもとを訪れたレオは、母から聞かされた話に呆然とする。

「母上、今何とおっしゃいましたか？」

執務の手を止めた母女王は、机の上に腕を置いてもう一度レオに言った。

「一ヶ月後のあなたの誕生日に、あなたとダリスの結婚式を行います」

「ちょっと待つてください！ ダリスとですか！？」

焦つて執務机に両手を突いたレオを、母は意外そうな顔をして見上げる。

「ダリスだと何か不都合があるのですか？ 身分のつり合いがそれで、幼馴染で気心が知れていて、先日あなたが行方不明になつた時も、誰よりもあなたを案じ夜通しの捜索に加わり、まつさきに見付け出してくれました。誰もあの海岸で見つかるとは思わなかつたのに、捜せる場所はすべてあたるべきだと主張したのもあの子です。これも愛情の成した奇跡。今まであなたがダリスを選ぼうとしなかつたことが、不思議なくらいです」

「ですがわたしには」

「言いかけて、レオは口をつぐむ。

「何ですか？」

「いえ、何でもありません……」

視線を降ろし引き下がつたレオに、母クローディアは常より厳しく言い放つ。

「ともかく、今から妃選びをやりなおしている時間はありません。

国民はあなたの即位を心待ちにしているのです。世継ぎの義務として、二十歳の誕生日に必ず即位しなければならないということを忘れないよ。」「たう」「……はい」

レオは反論も何もできず、そのまま退室した。

廊下に出ると、壁にもたれていたダリスが近寄ってきた。

レオより一歳年下のダリスは、未婚ということあって髪は上のほうを軽くすくつて結つているだけで、ドレスも娘らしく若草色を基調にしたフリルのたくさんあしらわれた華やかなものを身にまとっている。整った顔立ちをしていて目が少々つり上がっているため、美しいけれどどこか近寄りがたいきつい印象があった。

その顔立ち同様、性格も多少きつくって、思つた事は何でも口にするところは長所でもあり短所でもある。

「あなたは幼馴染だから大事だし、だから他の人に止められても夜通しの搜索に加わったけど、結婚するとなつたら話は別だわ」

頭半分ほど背の低いダリスは、レオの真正面に立つて顔を見上げてくる。

「あなたはわたしを愛していない。そうよね?」

挑発的に顔を近づけられ、レオは上体をわずかに反らして距離を取りながら答えた。

「ああ、わたしもおまえのことを幼馴染として大切に思うが、恋愛感情は……」

「わたしもあなたに恋愛感情はないわ」

きつぱり言い切ると、ダリスは口の端を上げ、不敵ともいえる笑みを見せる。

「わたしは愛のない結婚なんてまっぴらぐめん。誕生日までの残り一ヶ月足らずの間に、何とかしてわたしじゃない別の相手を見つけてね」

言いたいことだけ言つて、ダリスはひらひら手を振りながら去つていつた。

帰国した招待客に謝罪の手紙をしたため、捜索にあたつてくれた各部署の長に感謝を述べて回つた後、レオは自分が倒れていた浜辺に降りていつた。

大きな岩と岩に挟まれたようなその小さな浜辺は、真つ白な砂が波によつてきれいにならされ、小石は多少あるものの、他は貝殻一つうろこ一つ落ちていない。そしてその浜辺から見える海は遠くに地平線が見えるばかりで、波間に何も見つけることはできなかつた。

背後から、従者のリヒドが遠慮がちに声をかけてくる。

「王子、あの夜に何かを失くされたのですか？」

あれは、失くしたと言えるだろ？

怯えた顔をした、愛らしい人魚。

熱にうなされていた三日間の間に、思い出したことがある。冷たい海の中で、レオは懸命に自分を抱き寄せる小さな体を感じていた。間違いない。わたしはあの娘に助けられた。

もう一度会えたら、言いたいことがある。

あの時は驚かせて悪かった。助けてくれてありがとう。

そして、そして。

ここまで考えたところでの、レオの思考は止まつてしまつ。

あなたを一目で好きになりましたと告げて、どうなるというのだろう。

自分は人間、彼女は人魚。

陸で暮らすことはできないであろう彼女を妃に迎えることはできない。それ讓人魚の存在が人々に知られてしまつたら、どんな騒ぎが起ころるかわからない。不思議な姿形から、手元に置きたいと目論

む好事家たちが捕獲しようと躍起になるだろうし、人魚の肝が不死の妙薬になるという伝説から、人々はこぞって繰り出し海を荒らして回るようになるかもしれない。

人魚に助けられた者として、沿岸の国に生まれ海を愛する者として、海の平和が乱されることだけは避けたかった。

だから、人魚に恋をしたなどと言つ出すことはできない。たとえ、レオが一番に信頼を置くリヒードであつても。

「いや、何も……」

レオは寂しげに答え、小さな砂浜を後にした。

5、片思い

誕生日の大脱走を境にして、サー・シアの様子はがらりと変わった。言いつけを守り城で大人しくしているだけでなく、気付けば悲しそうにため息をついている。

いつも元気でみんなを困らせる」とばかりしていたサー・シアの豹変ぶりに、父王も、兄姉たちも心配して、いつもより頻繁に構おうとする。

「サー・シア、城から出てはいけないが、何でも欲しいものを取り寄せてやるぞ」

「今は何もいらないわ、父さま」

「じゃあ街で評判の劇団を呼び寄せよつか？ それともサー・シアはサー・カス団のがいいかな？」

「兄さま、今はそんな気分じゃないの」

「お城の中全体で鬼ごっこをしましょ！ 手の空いている者たちを集めれば、かなりの数になるわよ」

「姉さま、わたしもう、鬼ごっこして遊ぶ歳じゃないのよ？」

城の中を泳いでいると誰か彼かに話しかけられてしまつて疲れるので、サー・シアは次第に私室にこもりがちになる。

私室にこもるようになると、サー・シアの気分は更に沈んでいった。窓辺から海の上のほうを見上げ、サー・シアはぽつんとつぶやく。

「海の上に出たいな……」

聞き付けたリリアは、もう何度目になるかわからないその問いかため息交じりに答えた。

「成人の儀式をすっぽかしてしまわれたのは、サー・シア様ではありませんか。儀式は改めて次の満月の日に行われますから、それまで我慢してください。そうですね。今街にサー・シア様がお好きな話を

よくする吟遊詩人が訪れているそうですよ。わたしとセラ様をお供に付けてくださるなら、外出のお許しを王様にお願いしてみますわ」リリアは、サー・シアが落ち込んでいるのは、城の外へ出してもらえないせいだと思い込んでいるらしい。それがいいとばかりに弾んだ声でサー・シアに勧める。

そうじゃないのよ、とも言い出せず、サー・シアは深いため息をついた。

サー・シアを喜ばせることができなかつたとわかると、リリアはしゅんとして調度品を磨く作業に戻つた。

父よりも、兄姉よりも親しいリリアにでも言つわけにはいかない。海の上に出て、ニンゲンを助け、そのニンゲンに姿を見られてしまつたなどとは。

それはプリンズランドのみならず、人魚全体における禁忌中の禁忌だつた。人魚を見たという噂がニンゲンの中に広まると、ニンゲンはやつきになつて人魚を探し出そうとするといつ。ヒトと同じような上半身を持ちながら、ヒトとは違つ珍しい生き物を手に入れんとして。その肝は不老不死の妙薬になるなどといつ言い伝えさえあららしい。

ニンゲンが人魚を探して海を荒らし回るよになれば、人魚たちは決してニンゲンたちに姿を見られないよう、ほどぼりが冷めるまで海の底でじつと息をひそめていなければならなくなる。海面近くでしか手に入らない食べ物などが手に入らなくなるのだ。

なのにサー・シアは、もう一度あのニンゲンに会いたくて仕方なかつた。

あれからもうすぐ三週間が経つのに、ニンゲンたちが人魚を探しているという話を聞かないからかもしれない。

見られたと思つたけど、もうろうとしていた様子だつたから、もしかするとサー・シアが人魚だと気付かなかつたかもしだれ。気付いていたとしても、忘れてしまつたかもしだれ。そうだとしたら

嬉しい。人魚が何人たりとも海の上に出ないよう厳戒態勢を布かれることはなく、あのニンゲンをこつそり見にいくことができる。

でもどうしてなんだろう。何故たった一度会つただけの、しかもニンゲンなんかに、いつも会いたくなるのか。

「……ねえ、リリア。リリアは誰かに会いたくて仕方なくて、そのことで頭がいつぱいになってしまふことつてある？」

何気に聞いただけなのに、リリアは田をまんまるに見開いて、調度品を磨いていた海藻の布をほっぽり出してサー・シアの側へ泳いできた。

「まあ、サー・シア様！ いつの間に恋などなさったんですね？」

「え？」

思わぬことを言われ、今度はサー・シアが目を丸くする。リリアは両手を組んではしゃぐように言った。

「会いたくて仕方ないという気持ちは、間違いなく恋ですわ！ その人の顔をずっと見ていたくて、いつでも側にいたくて、それで苦しくなるんです。サー・シア様は恋をなさったから、苦しそうなお顔をなさつてたんですね！」

恋 ?

サー・シアは呆然とする。

「お相手はどなたですか？ どんな方でもサー・シア様がお好きになつた方ですもの。きっと王様が結婚させてくださいますわ」

「……リリア、わたしそういう相手がいるなんて、一言も言つてないんだけど」

「え？ 違うんですか？」

「気まぐれに聞いてみただけ。その様子だと、リリアにもそういう相手はいないのね」

言つだけ言って、サーチアは再び窓の外に目を向ける。

何でもない振りはしたけれど、サーチアの心臓はぱくぱくと鼓動を速めていた。

わたしが、あの二ングンに恋?

そうなのかもしない。サーチアは彼のことを想つ度、胸があつたかくなりしあわせな気分になった。そして側に行けないことがつらかつた。

もう一度会うことができても、サーチアは人魚、彼は二ングン、海と陸に隔てられて結ばれること叶わない。

「ちょっと寝てくるわ」

まだ側にいたリリアの横をすり抜けて、この部屋と続きになつている寝室へ向かう。

「まあ、お体の調子が悪いのですか? 医者をお呼びしまじょうか?」

追いかけてくる声に、サーチアは振り返らず答えた。

「ちょっと気分がすぐれないだけだから、寝ていれば治るわ。しばらくの間、一人でゆっくり寝かせてね」

「わかりました」

分厚く幾重にも重なつた昆布のカーテンをぐりり抜け寝室に入る
と、海藻のやわらかい纖維で織りあげた肌触りのいい寝具の使われ
た寝台にもぐりこんだ。

恋を自覚してしまつた途端、悲しくて仕方なくなつて、リリアの
前で泣き出さなかつただけでも上出来だと思った。

シーツを頭からかぶり、声を殺して涙を流す。

いくら父さまが偉大でも、二ングンと結婚なんて無理よ……。

叶わぬ恋に、胸が張り裂けそうになる。

これはサー・シアを心配してリリアが感じた痛みとは違う。苦しくてたまらない。忘れようとしても忘れられず、あきらめようとしてもあきらめられない。

どうしたらこの痛みから逃れることができるの？

恋をするのも初めての、まだ大人になつたばかりのサー・シアにはわからない。

「サー・シアが伏せつてゐる？」

分厚いカーテン越しに、兄の声が聞こえてくる。

「ご気分がすぐれないそうです。眠れば治るからとお医者をお断りになられまして、しばらくゆつくりお休みになりたいそうです」

リリアが答えると、兄はぼやくように言った。

「サー・シアのお気に入りの吟遊詩人が、今街に来ていると聞いてね「その話は先程わたしからサー・シア様に申し上げたのですが、サー・シア様はため息をついてしまわれて、乗り気でいらっしゃらないご様子で……」

「そうか……。一体サー・シアはどうしてしまつたんだらつ。そんなにセラとの結婚が嫌だつたんだろうか？」

「そのお話でしたら、王様はとつくなかつたことにしてくださいたではありませんか。サー・シア様を想い煩わせてくることはきっと別のことです」

兄とリリアの会話はまだ続いていたけど、サー・シアは考え方をするのに集中した。

サー・シアのお気に入りの吟遊詩人といえば、古今東西の恋物語をよく語つてくれる吟遊詩人だ。この国に伝わるおとぎ話もよく知つていて、サー・シアはその中の一つが特にお気に入りだつた。

ニンゲンの男に恋をして、魔女のおばあさんからニンゲンになる薬をもらつて会いに行つた人魚の娘の話。その恋は報われず、娘は

海の泡となつて消えてしまつた。

『この話のことで、姉たちから脅されたことがある。

『魔女は実在するつて話よ~。何でも街外れにある渓谷に住んでいて、いつも妖しい薬をぐつぐつ煮込んでるんですつて』

『ちつちゅいサー・シアなんか、おばあさんに近づいたら薬の鍋と一緒に煮られちやうんだから』

『レーメル様、アイレス様、やめてください~。サー・シア様が興味をお持ちになつて渓谷に近づいたりしたら困ります。サー・シア様、渓谷は深くて真つ暗で、何があるかわからない危険な場所ですからね。決して近づいてはいけませんよ』

『そうだ。その魔女のおばあさんが見つかつたら、もしかするとあの二ングンに会いに行けるかもしない。』

『そうひらめくと、サー・シアの涙は引っ込んだ。』

もう一度会えればそれだけで満足できてしまふかもしない。ほんのちょっと、一晩だけ二ングンになれれば……。

思いついたら、いともたつてもいられなくなつた。

サー・シアは夜まで寝室にこもり、リリアが今日の務めを終えて退室したのを見計らつて、ひつそり城を抜け出した。

真つ黒い穴がぽつかり空いているようで氣味が悪かつたため、リリアに言われなつても近づいたことのなかつた渓谷。

サー・シアは布に巻いて隠し持つていた夜光虫のランプを取り出し、それで前方を照らしながらゆっくりと下りていつた。

おばあさんの家は簡単に見つかった。何しろ、真つ暗な渓谷の中で、一か所だけほのかに明るかつたからだ。近づいてみれば、それは古やぼろぼろの板切れなどを集めたあばら家だった。

「あのう、もしもし。ここは魔女のおばあさんの家でしょつか?」

「そうだよ」

中からしわがれた声が返つてくる。

……こんなに簡単に見つかつていいんだらつか。

怪しいと想つて返事をためらつていると、もう一度中から声がかかつた。

「二ングエンになるための薬が欲しいんだ？」 あたしゃ今手が離せないんだ。勝手に入つておいで」

ますます怪しいと思つたが、二ングエンになるための薬と聞いて、誘惑と好奇心に誘われて海藻の入り口をくぐつた。

中は、外から見るよりずっと明るかつた。小さな部屋のあちこちに夜光虫のランプがはめ込まれていて、大小さまざまな壺が傾いた棚にたくさん置かれているのがよく見える。部屋の真ん中には大きな鍋があり、しわくぢやな顔をした背中のまがつた老婆がひしゃくで中をかきませていた。鍋の下からは熱湯が吹き出しているらしく、部屋の中の海水はかなり熱い。

「おまえさんがゆであがつちまわないうつり、話を済ませてしまおうかね」

「……何でわたしが、二ングエンになるための薬を欲しがつてゐてわかつたんですか？」

「ひえつ、ひえつ、ひえつ」

老婆は鍋の中をかき混ぜながら、不気味な笑い声を立てる。

「あたしゃ魔女だよ？ ここにいながら何でもわかるのさ。のう、プリンズランドの第八王女サー・シア、おまえさん、二ングエンの王子に恋をしたんだろ？」

魔女だから何でも知つているところ言葉に納得しつつ、自分でもまだ信じられないでいる恋心を言ひ出でられて、サー・シアはうつたえる。

「えつ、あの」

「それは間違いなく恋だよ。おまえさん、王子に一皿ほれしたんだ。もう一度会えば気持ちが冷めるもんじやない。それに、一時的に二ングエンになつて、またもとの人魚に戻るなんていう都合のいい薬な

んぞ、あたしや持つてないよ」

そんなに簡単に事が運ぶはずがないか……。

肩を落としてがっかりする。そんなサー・シアに老婆は言った。

「あんたにや、がっかりしてゐ暇なんかないよ。早くお決め

「な、何を……？」

戸惑うサー・シアに、老婆はにあと笑つ。

「王子に会いに行くのか、あきらめるのかをだよ。二ングンになる薬を飲めば、一生海へは戻れない。だけどここであきらめたら、あんたは一生二ングンになれない。あんたがいなくなつたことに、城の奴らはもう気付いてるからね。すぐここまで搜しに来るよ。前回、あんたが王子を助けた日も、ここまで搜しに来たからね。あんたが掟を破つて成人の儀式の前に海の上に出て、二ングンを助けたことは知つてたけど、捜しに来た兵士たちには黙つといてやつたよ。

感謝おし

「それはありがとう。で、ここであきらめたら一生二ングンになれないってどうじうこと?」

「気持ちのこもつてない礼だねえ。まあいいだ。想像つかないかい? あんたがこの辺で見つかつたとする。そうすると、あたしの家に用事があつたと誰だつて気付く。あんたはおどぎ話と噂を頼りにここまで来たと、親しい者たち 世話係のリリアやあんたの姉さんたちは氣付くだろう。『二ングンになりたいだと? 馬鹿を言うな!』と王は怒る。脱走の得意なあんたは今まで以上に厳重に部屋に幽閉されるが、始終監視付きで暮らさなければならなくなるのさ」

幽閉か監視付き……。

サー・シアはぞつとして身を震わせる。

「だが、あんたが二ングンになるつていうなら、あたしの力で一瞬にしてあんたが王子を引き上げた浜に送つてあげるよ

要するに、捜索の手に見つかれないよう、二ングンになれる場所まで送つてくれるということらしこ。

思案らしい思案をしないまま、サー・シアは答えた。

「じゃあ二ングンになります」

老婆はあきれた顔をする。

「あんた、もうちょっと考えたらどうだい？」一度とHや兄姉たちや、世話係のリリアと会えなくなるんだよ？」

サーシアは泣きそうになりながら言った。

「もついつぱい、いつぱい考えたもの。二ングンに会いたいなんて思つちやいけない、忘れなきやつて。でも忘れられなかつたの。父さまで、兄さまや姉さまやリリアに会えなくなつても、あのヒトに会いたいの」

「……そうかい。あんたの覚悟はわかつたよ。じゃあ二ングンになる薬をやつ」

「あ、ちょっと待つて」

老婆はおどろおどろしく告げて場を盛り上げよつとしたのに、サ

ーシアの能天気な声に雰囲気を挫かれる。

「さつきまで泣きそうな顔をしてたくせに、なんだつていつんだい！？」

「薬はタダじゃないんでしょ？ 何が欲しいの？」

老婆は田を丸くして、それから大笑いした。

「あんたてつきり考え無しな箱入り娘かと思つたけど、物事の道理を多少はわかつてゐみたいだね。その通りさ。あたしも苦労して作つた薬を譲るんだからね。それ相応の報酬をもらひよ。そうだね、あんたのその可愛らしい声をおくれでないかい？」

にやにや笑う老婆に、サーシアは小首をかしげる。

「それも不思議に思つたのよ。おどき話でも声を引き換えにしたつてことになつてゐけど、おばあさんの声はしわがれてるわよね。報酬の声はどこへいったの？」

老婆は大きく田を見開き、それから大声で笑い出した。

「あつはつは！ さすがはアガートラムの娘だよ！」

「アガートラムって、父さまのこと？ 父さまを知つてゐるの？」

老婆はサーシアの質問に答えず、鍋から離れ、棚から小さな壺を

持つてきた。

「そうひ。あたしが本当に欲しいのはあなたの声じゃない。これは試練さ。想いを伝える手段を持たずには相手の心を射止められるか、あんたを試したいのさ。それができた時、おまえは初めて本当の二ソングになれるし声も返してやる。だが、想いが届かずおまえがあきらめてしまったら、その悲しみがおまえの体を溶かし海の泡に変えてしまうからね。どうだい？ それでもこの薬が欲しいかい？」

サー・シアは「ぐりと喉を鳴らし、そして覚悟を決める。

「それでも欲しいわ」

「よく言った！」

老婆はサー・シアに壺を押しつける。

「浜に上がってから、壺の中身を全部飲み干すんだよー。そりー。お行き！」

サー・シアが壺を両手にしつかり持つた途端、視界がぐるっと一変した。

……もつひとつと親切に、浜まで上げてくれたらいいじゃない。一瞬で移動させられるなら、それぐらいの手間わけなこと思つのだ。波の力を借りて懸命に陸に上がりながら、サー・シアは心の中でぶつぶつ文句を言つ。

が、すぐに思い直した。浜に上げてもうひとつしても、もし空中に移動させられてしまつたら、落っこちた時すごく痛い思いをするだろ。陸に上がる苦労と多少の痛み、落下する恐怖と痛み、どっちがいいかと言つたら、どちらかといえば前者だ。

よつやく浜に上がったサー・シアは、壺を両手に持ち直して考えた。

「これを飲んだら父をまや監と一度と会えなくなる。

あのヒートの心を射止められなかつたら、海の泡になつてしまつ。

でも、見事射止めることができれば、本当の「インゲンになれる」、声も返してもらえるのよね？ 心を射止めないでいいのさ、つまり両想いになればいいってことかしら？ もうしたらもしかしてあのヒトと結婚できちゃつたりして…？

「あやーー。」

カーシアは自分の都合のいい考え方、悲鳴を上げてもだえる。

あ、いけないいけない。

やうじえぱーじの薬、氣絶するせじまぜこいつおじせ話にあつたよ
うな……。

カーシアの手のひらにすりっぽり取まる小切れだけど、この中に一
つぱり入ってるものを一気に飲み干すのは大変そうだ。

それでもじじまで来たからこな、後戻りなんかしない。

カーシアは息を止めて壺のフタを開け、鼻をつまんで口の中に壺
の中身を流し込む。

思つたよりひどい味ではなかつた。けれどひじこめまこがして、
座つた状態から仰向けに倒れてしまつ。

薄れゆく意識の中、カーシアは思つた。

そういえば、足の裏の話を聞き忘れたわ。歩くたびに千の針で刺
されるような痛みがあつたらいやだなあ……。

やつぱり本当のじじだと叫ばれても、一ソングになるのをやめ
よつとは思わなかつたけど。

やつしてカーシアの意識はふつと途切れた。

6、波打ち際の少女

レオの誕生日まで、あと一週間に迫っていた。

「ホントに探す気があるの！？」

執務室まで押し掛けってきた有力貴族の娘であるダリスが、机に「ばんつ」と両手を突く。

「わたしとの結婚を、そこまで嫌がることないだろ？」「

幼馴染であり、恋愛感情でなくとも好意を持つている相手からここまで拒まれてしまつと、それなりに傷つく。

ため息交じりのレオの返答に、ダリスはただでさえつり田な田元を更につり上げた。

「嫌がりたくもなるわよ！ だつてレオつてば、わたしと結婚しなきやならないかもしけないつていうのに、一度も口説こうとしないじゃない。そこまでわたしに興味のない男なんて絶つつ対に願い下げ」

「なるほど。一理あるな」

冷静に相槌を打つたのがいけないらしい。ダリスはキンキン声で叫ぶ。

「一理とか一理とかいう話じゃない！ あなたわかつてんの！？ あと一週間の間に結婚相手を見つけないと、わたしと結婚しなくちゃならないのよ！？」

レオは両手で耳をふさいで、破壊的な声から身を守る。そして小さくため息をついた。

「」連日ダリスから文句を言われ続け、レオは申し訳なさを通り越して辟易していた。

「そんにわたしとの結婚が嫌なら、母上に直接そう言えばいいじゃないか。娘のようにかわいがつているおまえの言い分を聞かない母上ではない」

かねてから言いたかったことを口にするが、ダリスはとたんにお

となしくなった。肩をすぼめ、うつむき加減に視線をそらす。

「それはわかつてゐる。だからこそ言えないの。女王様はあなたに無事王位を譲るためだけに、長年玉座との國を守つてきたのよ。それが、あなたが結婚相手を決められなければばかりに台無しになつてしまつたらおかしいそうじやない」

「台無しつて、大げさな」

誕生日までに結婚できなかつたからといつて、レオが即位できなくなるわけではない。が、ダリスはもう一度机を大きく叩いた。
「大げさなもんですか。國中にも、國外にも、あなたが二十歳の誕生日に即位するつて告知してしまつてあるのよ？　なのに結婚相手が決まらないからつて延期？　そんなことしたらあなたは何年も前から決められていた予定すらこなせない無能呼ばわり、そんな息子を育てたつてことで女王様の信用もがた落ちよ。結婚しないで即位するために今から昔からの決まり事を変更しようもんなら、王家は國民に恥さらし、國は他国に恥さらしだからね」

ダリスの言う通りだから、ぐうの音も出ない。即位はできる。だが、誕生日までに結婚できなかつた時の代償は大きいのだ。

悲しそうに眉根を寄せて、ダリスは言った。

「レオのせいであつても、國やあなた自身の名譽が損なわれることになつたら、きっと女王様は心を痛められるわ。あなたの言うようにわたしは女王様にかわいがつていただいたからこそ、女王様を悲しませることはしたくないの」

そうだった。ダリスは言いたいことをすばば言つキツいところはあるが、その本質は情の深い女性だ。だから母からダリスとの結婚を言い渡されて、最初は驚き抵抗を覚えたものの、その後はダリスと結婚してもいいかなという気持ちに傾きつつあつた。にもかかわらず口説きはしなかつたのだけ。どうせ好きになつた女性とは結ばれない。だったら異性としてではなくとも、好意を持つ相手と結婚できればそれでいいのではないかと。

だが、そうしてなし崩しに執り行われた婚姻は、きっとダリスを

不幸にする。ダリスを不幸にしてまで王位継承者としての義務を果たすわけにはいかない。ダリスとの結婚は取りやめてもらひよう母に言おう、そう口にしようとした時、先にダリスは言った。

「ともかく！ わたしとの結婚は最終手段としてとつておいて、残り後一週間のうちにお相手を見つけてちょうだい。何ならお忍びで下街にでも行つてみなさいよ。魚よりもぴっちぴちの女の子が一ぱいいるから。それとも誰かみつくりつて紹介してもいいわよ？」

……そうだった。ダリスは情の深い女だが、そのために自分のし

あわせをあきらめるような女でもなかつた。

ダリスのこのたぐましさにはたまに疲労を覚える。今でも疲れるのに、結婚して始終側にいるようになつたら、もつと疲れることになるだろ？

執務机に肘をついてぐつたりするレオに、ダリスは言い聞かせるように静かに言った。

「沿岸諸国で肩を並べる国がない大国の王子であることは幸運なことなのよ。他国から結婚を押しつけられることも、他国にお願いして婚姻とこう結びつきを作る必要もない。女王様は好きな相手と結婚していいと言つてくださる。残りの一週間を無駄にしないことね。わたしは自分のしあわせをあきらめるつもりはないけど、レオ、あなたのしあわせも願つているのよ」

わたしのしあわせ、か……。

レオは自嘲気味に、心の中でつぶやいた。

部屋に閉じこもつていては出会いがあるわけないとダリスに言われ、自分の執務室から追い出された。けれど結婚相手を探しに行く気になれず、誰もいない城の真下の小さな浜辺に足を運んでしまう。

三週間前に助けてくれた人魚のことが忘れられなくて、時間がでるといふとこの浜を訪れていた。

あの人魚は怯えていた。捕まえられてしまつかもしれないと恐れたのだろう。あんなに怯えていたのだから、きっともう姿を現さない。けど、もしかしたらまた近くまで来てくれるのではないかとう期待を捨てきれない。

もう一度会いたい。会つてお礼を言つて……だからとこつて、恋が成就するわけではないけど。

そんなことを思いながら、いつも通り岩の影をのぞいてみて、そこでレオは息を飲んだ。

船上パーティーの翌日、レオが倒れていた岩の影に、一人の少女が横たわっていた。

赤みの強いストロベリーブロンドの髪。小さくて卵型の顔には、可愛らしい鼻とふつくらした小さな唇が載つている。瞳は閉じているけど、それでもとても愛らしい容貌をしているのがわかつた。

レオはその愛らしさに驚いたわけではない。

めつたに人の訪れない場所に少女が横たわっていたことにも驚いたが、その愛らしい容貌に見覚えがあつたからだ。似てる。あの夜わたしを助けてくれた人魚に。

けれど少女は人魚ではなかつた。ほつそりとしていて本当に歩けるのかと心配なくらいだが、ちゃんと一本の足がある。

落胆を覚えるのと同時に、レオは慌てた。からうじて胸には貝の胸当てを着け、肩に薄い衣がかかつていて、何故か下半身は何も身につけていないのだ。

レオは目をそらしながら上着のボタンを外し始めた。

「王子、レオ王子ー どちらにいらっしゃいますか？」
リヒドが近づいてくる気配がする。

「ここにいる！ だがしばしそこで待て」

ボタンを全部外して上着を脱いだレオは、少女の上に上着をかけると側にひざまずいた。

「来ていいぞ」

リヒドに声をかけながら、レオは少女の手首を取った。温かい。脈もあるようだ。顔に手をかざしてみると、かすかに息の流れを感じる。

「その少女は？」

「ここに倒れていた。城に連れて帰つて手当てをしよう」

そう言つてレオは少女の方から太腿までを覆つた自分の上着で少女を包み、両手に抱え上げる。

「王子、わたしが」

リヒドに任せようとして、ふと思いつどじました。

「いや、いい」

こうしたことは従者に任せることだ。だがレオは、あの人魚に似た少女を他人の手に預けたくないと思つたのだつた。

少女はとても軽く、城までの急な階段を抱えたまま昇つても、大して苦にならなかつた。上着で膝まで隠しているとはいえ、素足をさらしたあられもない姿をできるだけ人に見せないように、通用口から城に入つて客室の一つにこつそり少女を運び入れる。砂だらけなので浴槽の中に横たわらせると、リヒドが呼んできた年配の侍女頭に後を任せ、レオは私室に戻つた。少女を抱いていたため砂だけになつた服を脱ぎ、軽く洗い流してから着替える。それが終わると、少女を運び入れた客室に向かつた。

ノックして名乗ると、すぐに扉が开かれる。

「少女の様子はどうだ？」

「お気づきになられました。ですが……」

「入らせてもらおう」

何かあつたのか、侍女頭は言い淀む。らちがあかなかつたので、侍女頭を押しのけるようにして中に入った。少女の姿は扉を入つてすぐの応接室にはいなかつた。寝室のほうにいるのだろう。半開き

になっていた扉を大きく開けて入ると、中にいた者たちが一様に驚き振り返る。その中に、鏡台の前に座った少女がいた。少女の目はつぶらで、目をつむっていた先程よりさうに愛らしく見える。

やはり似てる……。

振り返って驚きに目を見開いた姿は、目を覚ましたレオに驚いて逃げていった人魚にますますそつくりだつた。

信じがたいものを見る思いでふらり近寄つていくと、少女の髪を乾かしていた侍女たちは少女から離れてレオに頭を下げる。少女の姿をさえぎる者たちがいなくなつたことではじめて、レオは少女がバスローブを身にまとつただけの姿であることに気付いた。

「し、失礼」

きびすを返そうとしたが、その前に少女は立ち上がりレオの前に立つてにっこり笑つてお辞儀をする。それから頭を上げ喉元に手を添えて口をぱくぱくさせた。

「しゃべることができないようなのです」

どうしたのかと問いかける前に、後ろからついてきた侍女頭が言った。

「君は

本当にしゃべれないのかい？」

そう尋ねようとしたその時、寝室に勢いよくダリスが駆け込んでくる。

「レオが裸の女の子を連れて帰つたですつてーー！」

額に手を当て、レオはうなだれた。誰なのか、そのよにあけすけな話をダリスに伝えたのは。

「しかも素っ裸に貝の胸当てだけの恰好だつたつて聞いたわよ！？」
レオの胸倉につかみかかつたダリスは、ふと側にいた少女に目をやり、それから思いつきりレオの胸倉を締めつけにかかる。

「こんないたいけな女の子に、あんたは何て事をさせてんのよーー！」
「ち、違う！ わたしがしたんじやない！」

そこに大きな咳払いが響いた。

「詳しい話はこちりで聞きましょ」

「あ……」

寝室の入り口に、こめかみに青筋を立てた母クローディアが立つていて、レオはどう誤解を解こうかとげんなりため息をついた。

難航するかと思つたけれど、説明したら案外あつさり誤解は解けた。

「そうよね。女の子に変なプレイを仕込む勇気なんて、レオにあるわけないものね」

……誤解が解けたのはいいが、こういう信頼のされ方を喜んでいいものかどうか。そもそも、これは信頼と言つていいものかどうか。

レオとクローディアとダリスの三人で応接室のテーブルに着き、状況のすべてを説明した。話し終えたところで、ダリスにこのように言われてしまい、複雑な思いに駆られて渋い顔をしていると、青筋のまだ浮かぶクローディアがおもむろに口を開いた。

「つまりあなたは、崖下の小浜で見ず知らずの少女を見つけたといふことね？」

「そうです」

何やら尋問を受けているような気分になつて神妙に答えると、クローディアは質問を重ねる。

「見つけた時点で、先程ダリスが叫んでいたような格好をしていたと」

念押しされ、空恐ろしいものを感じ冷汗の流れる思いでうなづく。クローディアはそれを見て目を伏せ、深く長いため息をついた。

「めったに人の下りてゆかない浜であなたが偶然少女を助けたのは僕僕ですが、少女の裸を見てしまったことはゆゆしき問題ね。かん口令を布きましたが、どこまで話が伝わってしまっているものやら」「ところで母上は誰からその話を聞いたのですか？」

内緒にしておけばいいものを、わざわざ伝えて面倒な話にした人物を特定して締めあげなければ気が済まない。

ふつふつとわき上がる怒りを抑えて尋ねると、クローディアは予想通りの人物の名前を挙げた。

「リヒドです」

「リヒドが報告に来た時、女王様の側にけよつとわたしもいたの」「リヒド……」

ダリスの自己申告も聞いて、レオは後ろに立つリヒドにじろりと目を向けた。レオに睨まれながらも、リヒドは何食わぬ顔で答える。「侍女頭から相談を受けたのです。少女がマニアチックな恰好をしているけど、これは王子の趣味なのかと。どうしたらいいかと問われたのですが一介の従者でしかないわたしがときが判断できることではなかつたので、女王に指示を仰ぎに伺つたまでです」

リヒドの隣に立つた年配の侍女頭は、胸の前で両手を握り合せながらおろおろと口を開く。

「あ、あの。申し訳ありません。王子が発見された時からあの恰好だつたとはつゆ知らず……。ああしたご趣味があるのでしたら、わたくしどもはどのようにお仕えしたらいいのかと思いまして。見て見ぬふりをしているだけでいいのか、何かお道具をご用意すべきなのか」「デーナ」

レオは侍女頭の名前を呼んで言葉をさえぎつた。

「わたしにそういう趣味は一切ないから、変に気を回して誰彼かまわす相談するのはやめてくれ」

「は、はい。申し訳ありません……」

「あなたにどのような趣味があるかといったことは、今は問題ではないのです。問題はあなたが少女の裸を一瞬でも見てしまったということ」

趣味云々は後で蒸し返されても困るのでここでそういうった趣味はないと認識の上で話を終了してもらいたいものだつたが、母の言う

「」とももつともなので黙つて話の続きを拝聴する。

「わきほざひらと見たところ、」の国の貴族の娘ではなさそうでしたが、もし他国で身分のある者だとしたら、」のことを理由に結婚を迫られかねません。ダリスとの結婚が決まる前でしたらそれでもよかつたのでしょうが……」

額を押さえて苦惱するクローディアをよそに、ダリスはけりつとレオに言つた。

「そりよ。あの子と結婚しかやえぱいにじやない。責任も取れて一石二鳥だわ」

ダリスの言葉を聞いて、クローディアは額を押さえる手を下ろし目をみはる。

「ダリス、あなたもしかして、レオとの結婚が嫌だつたの？」

「あ……それは、その……」

失言によって隠していたことを悟こ詮てられ、ダリスは困つて言葉をにじます。

「」ううして、寝室の扉が開いた。出てきたのは少女の診察をした城付きの医者だ。

「お体には特に異常は見られません。ただ、声のほうは何とも……。以前はしゃべることができていたようなので、もしかすると大きなショックを受けて、そのせいで精神的にしゃべれなくなつているのかもしれません。だとしたら一時的なものだと思いますので、そのうち回復なさいます」

医者の報告に、クローディアは毅然とした姿勢で答へる。

「」苦労でした。下がつてよろしい。少女のことはあまり吹聴して回らないように」

「かしこまりました。それでは失礼いたします」

医者が優雅に頭を下げて退室したところで、ダリスは席を立つて寝室に向かつた。

「ともかく、あの子から事情を聞かないと何も始まらないわ」

レオは慌ててダリスの後を追つ。

「事情を聞くといつても」

「大丈夫。任せて」

ダリスは自信ありげに言つて、寝室に入つていった。

少女はバスローブから夜着に着替えて、寝台のヘッドボードに枕を当ててそれにもたれて体を起こしていた。

「ここにちは。ちょっと失礼するわね」

ダリスはにこやかに声をかけながら少女に近づく。寝台の端に腰かけ、少女のほうに体をひねつて話しかけた。

「お腹は空いてる?」

少女はこくこくとうなずく。

「すごくお腹が空いてるの?」

大きくなずいた少女を見て、ダリスは近くにいた侍女に声をかけた。

「この子に食事を用意してあげて。最初はお腹にやさしいものがいいわ」

「かしこまりました」

言いつけられた侍女が下がつていぐのを見てから、ダリスは少女に向きなおつた。

「食事が来るまでお話をしましよう。わたしはダリス。この、ブリタリア王国の有力貴族の娘よ。よろしくね」

少女は少し悲しそうな顔をして、喉元に手を当てて口をぱくぱくとさせる。

「聞いているわ。しゃべれないんですつてね。一時的なものかもしれないから、心配することはないそ、うみ」

そう言つてダリスがにこり笑うと、少女はほつとしたりよつに表情を和らげる。

ダリスがこんなに子どもを相手にするのが上手いなんて知らなかつた……。

といつても、少女が本当に子どもかどうかはわからない。小柄で華奢な体つきをしていたが、貝殻に隠された胸はまあまああったよう気がする。

そこまで記憶をたどつたところで、レオは頬を赤らめた。すぐに目をそらしたつもりだったが、案外しつかり見ていたらしい。赤らんだ頬を誰にも見られないようになりげなく手のひらで隠した。

「文字は書ける？ ああ、使っている文字が違うのね。見たことのない文字だけど、あなたはどこの国の人？」

ダリスが覚えのある国名を次々挙げていくが、少女は首を横に振り続ける。覚えていたすべての国名を挙げ終えたダリスは質問を変えた。

「あなたはこの城、ブリタリア城の崖下にある浜に倒れていたのだけど、何故そこで倒れていたのか覚えている？」

少女は小首をかしげ、また首を横に振った。

そうしたやり取りを繰り返していくうちに食事が運ばれてくる。質問を切り上げ少女の食事の世話は侍女に任せて、ダリスとレオは応接室に戻った。クローディアはすでに政務に戻っている。先程のテーブルに、二人で着いた。

「要約すると、あの子ははるか遠い国の生まれで、長い航海の途中嵐にあつて船が難破して、運よくあの浜にたどり着いたということになるわよね。……あなたの時といい、この辺りの海流が大きく変化したのかしら？」

「そういう報告は受けていないが」

「でもそうとでも考えなきやおかしいわよ。一人もあの浜で助けられるなんて」

レオは黙つてダリスの言葉を聞き流した。

レオには心当たりがある。

自分を助けてくれた人魚。

あの心優しい人魚が、人に発見されてしまつ危険を冒して、再び人助けをしてくれたのではないかと。

レオと同じ場所に少女を引っ張り上げることで、レオに少女を助けて欲しいと言つてゐるようだと言つた。

「何にしてもかわいそうな話よね。近海で遭難者が他に見つかつたつていう話も聞かないから、もしかすると助かつたのはあの子だけかもしれないし。一緒に船に乗つてたつていうお父さまもお兄さまもお姉さまも……」

「……国へ帰るための手段を用意してやつてもいいが、場所も名前もわからぬ国へ送り届けるのは不可能だし、第一帰れたとしても国に身寄りは残つていないようだし」

「これも何かの縁ね。できるだけあの子の力になつてあげましょう」「そうだな」

「」の話が終わつてしまつと、どちらからともなく口を閉ざした。無言のまま時が過ぎるのを待つてゐると、寝室の扉が小さな音を立てて開く。

「お嬢様のお食事が済みました」

侍女の言葉を合図に立ち上がり、少女の元へ行く。

「お腹いっぱいになつた？」

寝台の端に腰かけてダリスが尋ねると、少女はこくんとうなずく。

「それであなたの今後のことだけ、あなたはどうしたい？」

少女は何か言いたそうに口を開いたが、声が出ないことを思い出したのか喉元を押さえて悲しそうにうつむく。

「ダリス、ちょっとといいか？」

場所を譲つてもらい、レオは寝台に腰掛けて少女の顔をのぞきこんだ。

見れば見るほど、あの時の人魚に似てゐるような気がする。だが、あの時の彼女には大きな魚の尾があつた。手元に残されたピンク色

の大きなうろこが、その記憶を間違いのないものにする。そして目の前にいる少女は間違いなく人間なのだ。

だが、これこそ何かの縁なのかもしれない。

あの時の人魚とは違う、きらきらとした目でレオを見つめてくる少女に、レオはふつと笑いかけた。

「君さえよければ、わたしのお嫁さんにならないかい？」

少女のつぶらな瞳が大きく見開かれる。後ろでダリスが叫んだ。

「ちょっとレオ！ さっきのわたしの『冗談を真に受けないで！』

「おまえはわたしと結婚したくなかったんじゃないのか？」

ちょっと振り返って言つてやると、ダリスは途端に口ごもる。

「それは、そうだけど……」

愛しい人はどうしたつて手に入らない。なら、愛しい人に託されたのかかもしれないこの少女を手元に置いていつくしめば、心の痛みも多少和らぐようになつたのだ。

「どうだらう？ わたしのプロポーズを受けてくれるかい？」

目を見開いてぽかんとしていた少女は、はつと我に返つてレオの言葉に何度もうなずく。レオの提案を喜んで受け入れてくれるようだ。

レオは笑みを深め、少女の手を取つた。

「それじゃあ、これからよろしく。わたしのお嫁さん

顔を真っ赤にする少女の目の前で、レオは少女の手の甲にキスをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1985y/>

孤独の人魚姫

2011年11月21日13時20分発行